
空消失の日【前篇】

真尾坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空消失の日【前編】

【著者名】

真尾坂

N1632N

【あらすじ】

末弟がマフィアのボスにされかけましたの番外編で未来編を軸にしてあります。

ボンコレ10代目最後の日の事。

(前書き)

色々と設定変更あり、駄文、矛盾なりの酷い出来栄えです。
色々とねつ造すらしてます。
色々と申し訳ありません。

世界中のマフィアが戦うか従うかしか道が無い世界。それが、白蘭が台頭した今の世界。

マフィアには白蘭の脅威に怯え、そのプライドを捨てたか戦つて地獄の末死を遂げるしか道は残されていない恐ろしい世の中。そして、エースにルフィ、綱吉の三兄弟はこの戦いに巻き込まれ、綱吉はその短い命をもう少しで終えようとしていた。

「考え直せねえのか？」

「兄さん、道は一つしかないんだよ」

落ち着いた問いの中に隠された藁をもすがる思いと涙をこらえる感情。彼がやろうとしている事をどうじても止めたい、考え直してほしいといつ思いが伝わってくる。

だけど現実はそんなに甘く無くて、もう道はないと綱吉は優しく諭すように受話器に声をかける。

駄目ツナだと馬鹿にされていたのはつい十年前だけど、成長して色々な経験した自分には現状とやるべき事は全て分かる。例えそれで誰かが悲しむことになるとしても

「もう少ししたらおれ達の場所に決着がつく、ルフィ達も応援に行けると言っていた。もう少し待つ事も出来ないのか？」

「今やらなければいけない事なんだよ」

考え直すよう自分が考え付く方法を考え、食い下がつてみるが頑として考え直さない。

小さい頃と大きく変わった弟綱吉、だけど一寸頑固な所は全然変わつて無い。駄目ツナと言われ馬鹿にされた10年前とボンゴレ十代目となり、沢山の人に尊敬されるようになった今。変わってほしい所が変わらないでどうするんだよ。

「こんななんなら駄目ツナと馬鹿にされて10年間変わらなければ良かつたのにと勝手な事すら思つてしまつ。

「これはどうちこしても世界を救う事に繋がるんだよ。7×3の一角の後継者であるオレだから出来る事なんだよ」

だから分かつてよ、兄さんとエースに優しく語りかける。その優しさが逆にエースの心を深く抉る。

何で綱吉はこんなに甘いのだろう。どうしてそんな彼がマフィアのボスの血を引いているのだろう。

甘いものが大好きだからこうなつてしまつたのか、甘いものを食べすぎないように厳しく叱れば良かつたと関係ないと分かつていてもちよつとした事すら後悔が絶えない。

ボンゴレの伝説をいくつか知り、綱吉の特殊能力で見破つた事で初代はとても善良だと分かつたがそんなもの自分には関係ない。弟にこんな枷を与えた初代ボンゴレが憎らしくてたまらない。

前世で嫌つた海賊王以上に憎くて殺したくて、綱吉の姓を聞きたくもなかつた。

「何でお前なんだらうな

もうそろそろ耐えきれないと電話越しで涙をぬぐつ。

兄弟の中で一番普通を愛し、小さな幸せを求めていた綱吉が大きな権力を押しつけられ、大勢を守るために殺されようとしている。

昔はこの世界を平穏で優しくと思つていたけど前世の世界よつずつと残酷だ。

何も悪い事をしてない弟が、甘くて仲間思いの弟が、どうしてこんな思いをするなんてあまりにも理不尽すぎる。世界が憎いと思う感情を抑えるのに精いつぱいだ。

「そんな事言わないでよ」

オレはこの運命を感謝してる、オレは幸せなんだよ。と綱吉は幸せ

そうに笑う。

駄目ツナと言われ、友達もいない意味の無い一日を過ごしていたあの頃は全ての事にあきらめ、何も学ぼうとしなかった。どうせ駄目だとすぐに逃げ、立ち向かうなんてありえなかつた。ちょっととした不幸を嫌だと感じ、ちょっととした幸せを知らず本当につまらない日々だつた。

だけど今は違う。全ての事が無かつたら今の自分はいない、今の自分は自分の運命があつたからこそ手に入れた。それのどこが不運だというのだろう、むしろ自分はついていると思う。

生んで大きくしてくれた母、自分を思つてくれる兄、厳しいけれど育ててくれる家庭教師、そして自分を大きくした数々の困難とそれを何時も支えてくれた仲間達。

何一つ無くて良かつたものは無い、全て宝だ。

「だからこそオレは行くんだ。白蘭を許すわけにはいかない、むやみに人を傷つけた事を後悔させる。これがオレの出来る事だから」「本当に兄貴は大変だ」

成長知つて声変りし、凜々しくなつた声に似合つ言葉。とても立派でもし白蘭じやなければ成長したなと褒めてやりたい。

どうしておれの弟はどの世界でもどんな奴でも無茶をしたがるのだろうか。

綱吉には一生分からないだろう、兄貴がどれだけ心配しているのか。赤ん坊の時からずつと見守り、守ろうと必死になつた幼い頃。苛められ、泣いている綱吉を見ては苛めた奴らを成敗し慰めていた小学校の頃。おかしい家庭教師に裏社会のボスに仕立て上げられそうになつた綱吉を守ろうとした中学生の頃。

そして沢山の仲間を見て、やつと安心したあの頃。

口では何回も兄さんには迷惑をかけたねと言われたけどきっとこの気持ちを理解してはいないし、して欲しくもない。これは自分だけ

の秘密の感情。

「兄さん、本当にありがとう」

そう言つと綱吉は通信機を切り、音は聞こえなくなつた。

ありがとうといふのなら、無事な姿を見せてくれ。可能性は少なすぎるといふからついていても願つてしまふのは馬鹿なのだろうか？

白蘭と共に熱すぎる雨が降つてきた。

嵐はもうすぐ。

世界中のマフィアが戦うか従うかしか道が無い世界。それが、白蘭が台頭した今の世界。

マフィアには白蘭の脅威に怯え、そのプライドを捨てるか戦つて地獄の末死を遂げるしか道は残されていない恐ろしい世の中。ルフィはその争いに巻き込まれ、死ぬ運命を歩もうとしている綱吉を何とかして助けようとしていた。

「何とかイタリアに行けねえのか！？」

「ルフィ……」

今にも掴みかからんばかりの形相と声色。その全てが彼の必死さを物語つている。

彼を諭す事が出来る人なんてきっと一人しかいないし、彼の姿を見たらそんな事する氣にもなれない。

彼がどんなに助けたいか、死なせまいと必死になつてゐるのか知つてゐるから。

外ではどこかで爆音が響く。又争いで誰かが傷ついたのだろうか。そう思つと涙が出てくるがそんな温情をかけられるほど現状は甘くない。

何時アジトがその爆音の発生場所になるか、もしかしたらすぐかもしれない。

運ばれてくる負傷者は後を絶えず、一歩外に出れば戦いが待つている。少しでもおかしな行動を取つてしまえばすべてが無駄となってしまう。

考えれば考えるほど現状の悪さを思い知られ、焦りと絶望ばかりが募る。

「一体どうすりゃ良いんだ！？」

彼には似合わない絶望に近い表情と苦悩に満ちた声。こんな姿見たくないくて、どうしても目をそらそうとしてしまう自分がとても嫌だと仲間達は思つ。

ルフィは変わり者で何時も前向きで樂觀的でそれに腹立つ事も少くないし、もう少ししつかりしてほしいとも思つた。だけどその前向きで明るい彼に何度も救われた事か、そしてそんな彼だからこそ今の自分がある事も良く分かっていた。

こんなルフィを見たくない、彼には笑つていてほしい。だけどそんな願いをかなえられない無力な自分がとても悔しい。

「おれは綱吉を助けたいんだ！！」

泣くように叫ぶように言い放つルフィ。

我儘なのは分かっている、周りを危険にさらす事は百も承知。だけど弟が大切でこの先の未来も一緒にいて欲しくて駄々を捏ねてしまう。

リーダー失格だと言われても良い、我儘だと非難されてもかまわない。皆に嫌われて独りぼっちになつてもかまわない。

弟が死ぬなんて絶対に嫌だつた。

初めて会つたのは奈々と出あつた日の事。お腹が大きいぞ、太つてると笑えば奈々はもうすぐ赤ちゃんが生まれるのよとほほ笑みながら答え、その温かく動くお腹を触らせてくれた。

そのお腹から出てきた猿のような男の子は綱吉と名づけられ、ずっと

と一緒に育つってきた。

優しくて、仲間思いな弟が大好きでずっと一緒に世界を生きたかった。そして、それを今までずっと信じてきたのにどうしてこうなったのか。

その運命に追い込んだ奴をブツ飛ばないと気が済まない。そしてそんな奴の為に大事な弟を殺されてたまるものか

「オレは7×3を担う大空の後継者だから、これはオレの仕事。だから兄さんは関係ない」

お前がやる必要はない、やるならおれがやると名乗り出た時、彼は宥めるかのようにそう言い放った。

流されやすいはずの綱吉はその一点張りで自分の願いを一切聞いてはくれなかつた。自分の気持ちなんて何も知らないくせに。

何でも一人で決め、人の話を聞かないなんて自分勝手すぎる。

それに7×3なんて知つた事ではない、世界創造なんて自分には関係ない。綱吉が大切で自分は兄だから助ける事の何が悪い。分からず屋だと言いたいなら言えば良い、綱吉が死ぬなんて絶対に嫌だ。

死ぬのはとても寂しくて辛い。それをルフィは知つていて。消えたはずの前世の記憶。だけどそこで培つたものや大きな悲しみは今でも何故か良く知つていた。

大切な人が死んで泣き叫び、絶望にくれたあの時の思いはいまだに消えやしない。そしてそんな思いをもう一度と味わいたく無い。

「オレは幸せだよ。くいが無いってこういう事かな」

そう言って笑い始めたのはいつの頃か。最初はその言葉を信じ、とても嬉しくてたまらなかつた。

だけどその言葉は嘘だと今は言いたい。

7×3というしがらみに縛られ、争い事が大嫌いなのに戦いに駆り出され、もつと生きていたいだろうに死ぬ世界に放り出される。

まだ仲間と一緒にやりたい事があるだろう、もつと平和な世界でのんびり生きたいだろ？」どうしてこんな思いをしなければならないのか。

それなのにこのまま死ぬなんて絶対に許せないし、耐えられない。だからこそ綱吉を助けたい。

雲の隙間から太陽が射し、ルフィの体を照らす。

晴れがもうすぐやって来るようだ。

今すぐにイタリアに行かないといけないのに行く術が思いつかない。今にも泣きわめきたい衝動に駆られつつも、頼りない頭を働かせる。自分は何もできない、ただ出来るのは仲間を守りブツ飛ばす事だけとは分かっていたし、それを悔やんだ事は一度もなかつた。だけどこの時ばかりは悔しくてたまらない。どうして自分は何も出来ないと。

その時だった。

「ルフィイ、敵が撤退してる！！」

モニターを見ていた仲間の声。そつちに飛んでいくとモニターに映る敵は後退し、消えている。

何故なのか分からぬ。もしかしたら腹かもしれないだけ今がチャンス。

「おれ、イタリアに行つてくる！！」

綱吉を助けられるのは今しかない、ルフィは急いで出口へと走る。

世界中のマフィアが戦うか従うかしか道が無い世界。それが、白蘭が台頭した今の世界。

マフィアには白蘭の脅威に怯え、そのプライドを捨てるか戦つて地獄の末死を遂げるしか道は残されていない恐ろしい世の中。

ボンゴレ十代目、沢田綱吉は今死の世界へと歩もうとし、部下達はそれを必死に止めようとしていた。

「安心してよ」

「絶対に罠です！！白蘭はそんな甘い男じゃない！！」

あんな男、見た事が無い。誰も思いつかなかつた兵器を使い大きなマフィアをつぶし降伏させ、誰も思いつかない薬品を使い味方の戦死率を大幅に下げる事に成功させ、最新の通信機器で内部の連絡機能を一気に向上させた。

そしてついには同じF-3を担うリングを守護するファミリー、ジツリヨネロファミリーまで味方につけてしまった。

こんな男にかなわない、勝つなんて無理だと誰もが思つた。

100年近く、最強最大を謳つたボンゴレファミリーもミルフィオーレファミリーに降伏すべきではないかと話し合いがもたらされた。

しかし

「オレは最後まで屈しない。死ぬなら可能性をすべて試してから死にたい」

綱吉は絶対に折れなかつた。まだ戦うと屈する事を良しとしなかつた。

超直感を持つ彼には良く分かつていて、もしF-3を担うボンゴレファミリーがミルフィオーレに屈した時、ファミリー所か世界が崩壊してしまつのを。

それは絶対に許せない、世界の人々を守りたい。

あまりにも理想主義で甘い考えだと人は言うかもしけれど譲れない。例え自分の命をささげる結果になつたとしても。

「獄寺君はオレを信じてくれないの？」

「そうでは無いんですけど……」

自分と対峙するよつに見つめる綱吉に獄寺は食い下がるしか出来なかつた。

彼の強さは良く知つてゐるつもりだ。そして彼が起こした奇跡を見てきた。何時もなら自分の愚かさを恥じて、地にひれ伏して謝つてゐるだろつ。

だけど今は違つた。白蘭はあまりにも不可解且つ強大で恐ろしい存在、綱吉でも勝てるわけは無い。

殺されるだけだ。あれは人間ではないのだ。

そのためにわざわざ会談という罠に自ら入つて死ぬなんて辞めて欲しい。

生きていてほしい、例え世界が滅びようと彼が生きているなら良かつた。

「獄寺君、またオレが生きてるなら世界が滅びてもかまわないと思つてない？駄目だよ」

優しくも厳しく叱りつける優しさに今にも涙がこぼれそうだつた。10年前、自分を助けてくれた時からずっとついて行こう、彼の為に生きようと決めていた。

それが自分の最高の喜びでそれだけは譲れなかつた。自分を大切に思い、守ってくれた十代目が大切でその為なら何でも出来る。

例え醜いと言われても彼が生きるなら全てを敵に出来る意思が獄寺には秘められている。

「大丈夫、成功させるよ」

未来が見えているような自信に満ちた眼差し。

それが嘘だと分かつていても騙されたかつた、綱吉の嘘を信じるふりをしたかつた、その嘘を信じ続けたかつた。

いつものように彼のいる世界が待ち続けていると思つていたかつた。どうして自分は大人になつてしまつたのか、成長し大柄になつた自

分の体を初めて憎く感じる。

騙され続けられる子供のままでいたかった。

「駄目なオレだけど、やつてみせるよ」

貴方は全然駄目ではありません。貴方と一緒にいた十年間、オレは一度すら貴方を素晴らしいと思わなかつた日は無い。ですから死に行くような行為はやめて欲しい、何としても生きて下さい。

そう懇願したいが何度もやつても失敗した。もつ彼の意志はどう説得しようと動かない。

「じゃあ、行こうか」

「はい、十代田」

車の手配はもう済んでいる。後はミルフィイオーレファミリーの本拠地という墓場に向かうだけ。

全てを破壊し、綱吉を連れて逃げたいと思いながらも彼と共に車へ向かう。

無意味な銃を持ち、無意味な護衛として無力さを感じるであろうことも関わらず、それでも彼は何処までもついて行く。

右腕になると決めたあの口から、自分は最後まで彼を守るために生きるのだから。

「すまねえな」

山本、笠川、雲雀にランボ。オレは十代田と共にきっと死ぬけれどそれで死ぬのは本望だ。

一人だけ幸せに死ぬ事を許してくれ、無責任な右腕で悪かつた。後は頼む、信頼してるからな。

今まで悪態ばかり付いていた仲間に心の中で詫び、後を託しつつ車に乗り込む。

嵐がやむのか吹き荒れるのかは誰にも分からない。

(後書き)

本当にダメすぎますね。人として恥ずかしい限りです。
多忙及びこっちを執筆してて本編の更新が遅れたのですがこんな出来栄えで本当にすみません。
もっと頑張ります。
そして続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1632n/>

空消失の日【前篇】

2010年10月28日05時20分発行